

東海道五十三次を往く

第30回

藤川宿



困窮の歴史を持つ宿場
現在は道の駅で賑わう

1601(慶長6)年に宿場町となつたが、規模が小さく、隣の岡崎宿が栄えていたこともあり、宿の経営は困窮。1648(慶安1)年に、現在の市場町にあたる山中郷市場村から68戸の宿を移す加宿措置がとられた。史跡は多くはないが風情ある町並みのほか、徳川二代目将軍・秀忠の命で植えられた立派なクロマツの並木や、一時生産が途絶えたものの、近年復活に成功した当時の名産「むらさき麦」の味わいも旅人気分を盛り上げる。



東棒鼻跡

「棒鼻ノ図」の標題にもなっている「棒鼻」とは、宿場の境界のこと。浮世絵師・安藤広重の絵には、棒鼻に差し掛かった八朔御馬献上の一行と、左手にそれを出迎える宿場役人の姿が描かれている。広重は、この一行に加わって、初めて京へ上ったと言われている。



津島神社

後に加宿した市場村の氏神として建立された神社で、夏には竿灯祭りが催される。



常夜灯

現在も地域の人々に守られる秋葉山常夜灯。

小川の風景

明星院の前から東海道と並行して小川が流れ、のどかな田園風景を創り出している。



品川宿から37番目を数える藤川宿。点在する史跡と、地元の人々の努力により復元された「むらさき麦畑」の、のどかな風景を眺めながら、当時へ思いを馳せる。

江戸時代、当地では「むらさき麦(紺屋麦)」が栽培され、その様を俳人・松尾芭蕉が句に詠んだ。麦の栽培は中断されていたが、地元の人々の努力によって現在は一部で復活。5月中旬には、名鉄線の赤い車両が紫色の畑の傍を行き来するのを見ることができる。



銭屋

風情ある町並みの中には、旅籠「つる屋」や町屋「米屋」「銭屋」などの建物が残されている。写真は藤川宿最古の町屋である「銭屋」。



本陣跡

当時の面影が残るのは、本陣の石垣跡。本陣の格式高さを窺い知ることができる(上)。本陣跡は広場として整備、高札場が復元されている(右)。本陣跡の隣の脇本陣跡は、藤川宿資料館となっている。

